

わたしの 好きなこと

仕事でも絵でも師匠を持たない 私にとって“自然”が先生



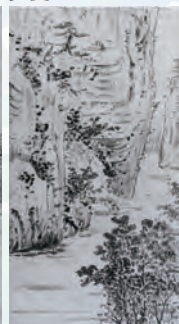
一昨年、33点描き上げた「シマエナガ」シリーズ。昨年は、そのうち6点を稚内しんきん利尻支店のギャラリーで展示し、高評価を得た。



利尻島の写実的な作品が多い。絵具のリキテックスは、重厚で練りが硬く、耐光性に優れている。筆やナイフのタッチもハッキリと残すことができる。

早春

猛夏



深秋

冬景

16歳から58歳まで建築一筋に
飯にもし小樽空襲がなければ
私は利尻島にいなかったでしょうし、現在のように仕事をリタイアした後的人生を、絵などの趣味に没頭して生きることもできなかったと思います。その意味では、利尻島への移住は運命だったのでしょうか。

そんな私の転機は58歳の時に訪れました。
中学校卒業後、すぐに建具職人として独り立ちし、やがて建築業を営みましたが、私の場合、最初から最後まで誰に教えるを乞うことなく、独学・独立独歩でやってきました。先生も師匠もいなかったからこそ、自由な発想と誰もやったことのない新しいことにも挑戦できたのです。当時から昆布漁師も兼ねていたのですが、建築の仕事が多忙のため思うようにならず、思いきって58歳で建築の仕事は廃業しました。

そうしてその年の冬に山（利尻山の麓）に入ったのです。そこで鳥や木などの自然との交流によって、私の中で何かが目醒め、すべてのお手本は自然の中にあることを悟りました。以来、利尻の「自然」が私の師匠、先生になりました。
自ずと漁師としても自然の理に合った手法を思いつき、自宅を拡張し昆布の干し場、乾燥小屋、倉庫を一体化し、家内とともに長期熟成昆布作りの道を極めました。それも一昨年にやめ、現在は趣味一本の生活です。

＜藤田さんの絵画創作のはじまりは水墨画から。山水を墨の濃淡、ぼかし、にじみ、かすれなどで表現する水墨画は、彩色ものより難しいという。四季を描いた4作品によく目を凝らせば、人間の生活が描かれていることが分かる。裏打ちなどの表装も全部自分で行なっている。＞

利尻島の四季、畳一帖シリーズより



たけとし
藤田 武利さん (88)

●昭和13年5月生まれ、利尻町在住。太平洋戦争の終結直前、昭和20年7月、空襲から逃れるため、一家で小樽から母の実家の利尻町に移住。以後、利尻町で育ち、建具職人（のちに建築業）のかたわら昆布漁師となる。58歳から絵画を描きはじめる。現在仕事をやめ趣味の世界に生きている。

山に入った時から創作意欲がどんどん湧いてきて、木を間伐すると、なんとなく「ありがとう」「これでコーヒーカップを作って」「私の絵を描いて」と聞こえてきたのです。それから無我夢中で絵を描きはじめました。水墨画に始まり、彩色は利尻の花100枚をスケッチし、色鉛筆、パステル、その後、油絵具のような表現が可能なりキテックスに出会い、5年前から利尻島を描くことをライフワークとしました。絵ももちろん独学で、最新作は、大きなサイズの畳一帖シリーズの利尻島の四季。秋冬から描き始め、今後春夏を描き進めます。木工やドローン撮影にも夢中、88歳の挑戦は続きます。

絵を描きはじめて30年